

米国の大学教授市場の特質

—社会学分野の成層を中心に—

有 本 章

目 次

- ま え が き
1. 大学教授市場の成層
 2. 大学教授市場の閉鎖的構造
 3. 大学教授市場の開放的性格
 4. 社会学教授の経歴型の事例
- 結 論

米国の大学教授市場の特質

—社会学分野の成層を中心に—

有 本 章*

まえがき

米国でいち早く発展した「大学教授(Professors, Academic man or woman, Academic Profession 等を含む)の社会学的研究」は最近日本でも漸く発展しつつある高等教育研究の一領域である。¹⁾小論の目的の一つは、従来の日本の大学教授市場(もしくは大学市場)に関する先行研究によって指摘された種々の問題点のなかで、主として市場における「移動性」の欠如ないし「閉鎖性」と「学問的生産性」ないし「創造性」の沈滞の問題は最も重要な問題点であると考え、²⁾その両者の関連性の視座から米国大学教授市場における成層(stratification)に注目し、その特質の分析考察を通して問題点の所在をより深く究明することにある。閉鎖性と創造性の関係は逆比例的である。なぜならば閉鎖性の特徴は同質性、同系繁殖、庇護、甘やかし、固定、単数、集中といった現象と深く連関するのに対して、その対概念の開放性は異質性、異系繁殖、競争、他流試合、流動、複数、分散といった現象と深く連関する。前者は消費、模倣、輸入と密接にかかわり、後者は生産、創造、輸出と密接にかかわると考えられる。したがって、閉鎖性が強まれば創造性は弱まり、逆に開放性が強まれば創造性は強まると仮説できる。日米大学市場はこのような「閉鎖性＝創造性抑制」「開放性＝創造性促進」という基軸で比較するとき、おそらく対照的な形を呈することになると発想することができるだろう。

このような発想は「科学の社会学」の領域での主要関心事である研究者、学者、科学者の学問的生産性や創造性はいかに社会的に規定されるかを考察するという、小論の他の目的と関係する。研究者、学者、科学者の個人的資質もさることながら、彼らの生産性や創造性は彼らを取りまく社会的要因によって規定される。とくに研究者、学者、科学者を主要に養成する大学制度や組織のあり方がきわめて重要であることは、例えばベン＝デイビッドの19世紀における医学分野の米英独仏間比較とかその他の研究、クレインの米国大学院の研究などによって実証されている。³⁾その点、米国の大学制度や組織が生産性や創造性を効果的に刺激しているのではないかと推論し得る理由の一つはノーベル賞受賞者数の国際比較から得ら

* 大学教育研究センター前任研究員／大阪教育大学教育学部助教授・エール大学客員研究員

れる。とくに自然科学部門は発明・発見のオリジナリティが客観的尺度によって評定されると思われるのでこの視角からの判定材料として適切だろう。表1によると、米国は1901年から1975年までの75年間に世界最高の受賞者を輩出した（全体の36.3%）。これは第2位英国（18.6%）の2倍、第12位日本（0.95%）の38倍に達し、日米格差は著しく大きい。人口100万人当りの輩出率で米国はスウェーデン、デンマーク、スイス、イギリス、オーストリア、ドイツ、オランダに及ばないが、受賞者輩出国中の最後から二番目に位置する日本との格差はやはり大きい。この格差は米国科学者の資質の優秀さに起因するというよりも、大学制度や組織などアカデミック・システムの特色に起因すると考えられよう。それは最近欧米の格差が拡大しつつあることによっても傍証される。表2のように、1930年代まで全受賞者の2

表1 ノーベル賞受賞者数の国際比較（1901 - 75）

国名	生理学 医学	化学	物理学	計	占有率 (%)	人口100万人 当り輩出率	(順位)
アメリカ	51	25	39	115	36.28	0.54	8
イギリス	19	21	19	59	18.61	1.05	4
ドイツ	10	24	13	47	14.83	0.76	6
フランス	6	6	9	21	6.62	0.40	9
スウェーデン	4	5	3	12	3.79	1.47	1
ソビエト	2	2	6	10	3.15	0.04	21
オランダ	2	1	5	8	2.52	0.59	7
スイス	4	4	0	8	2.52	1.23	3
オーストリア	4	2	1	7	2.21	0.93	5
デンマーク	4	0	3	7	2.21	1.39	2
イタリア	2	1	1	4	1.26	0.072	19
日本	0	0	3	3	0.95	0.027	23
ベルギー	3	0	0	3	0.95	0.31	11
アルゼンチン	1	1	0	2	0.63	0.08	17
カナダ	1	1	0	2	0.63	0.09	16
オーストラリア	1	0	0	1	0.32	0.074	18
アイルランド	0	0	1	1	0.32	0.32	10
インド	0	0	1	1	0.32	0.017	24
ポルトガル	1	0	0	1	0.32	0.11	14
ハンガリー	0	1	0	1	0.32	0.10	15
フィンランド	0	1	0	1	0.32	0.21	13
ノルウェー	0	1	0	1	0.32	0.25	12
チェコ	0	1	0	1	0.32	0.068	20
スペイン	1	0	0	1	0.32	0.028	22
計	116	97	104	317	100.04		

(註) 1. 人口100万人当り輩出率の計算は1975年を基準にした。(UNESCO: Statistical Yearbook 1975から算出)。

2. 資料: The World Almanac and Book of Facts 1977, The CBS News Almanac 1977より作成。

表2 ノーベル賞受賞者の国別市場占有率の推移 (1901 - 75)

期 間 国 名	1901 ~10	1911 ~20	1921 ~30	1931 ~40	1941 ~50	1951 ~60	1961 ~70	1971 ~75
ア メ リ カ	2.8	8.3	15.2	41.9	45.7	55.6	45.8	48.5
イ ギ リ ス	13.9	12.5	24.2	18.6	20.0	16.7	22.0	24.2
ド イ ツ	33.3	29.2	18.2	20.9	2.9	9.3	5.1	6.1
フ ラ ン ス	16.7	20.8	9.1	4.7	0.0	0.0	8.5	0.0
スウェーデン	2.8	8.3	9.1	2.3	2.9	1.9	5.1	0.0
ソビエト	5.6	0.0	0.0	0.0	2.9	7.4	5.1	0.0
オランダ	11.1	4.2	6.1	0.0	0.0	1.9	0.0	0.0
ス イ ス	2.8	4.2	0.0	4.7	8.6	0.0	0.0	3.0
オーストリア	0.0	4.2	6.1	4.7	0.0	1.9	0.0	3.0
デンマーク	2.8	4.2	6.1	0.0	2.9	0.0	0.0	6.1
イタリヤ	5.6	0.0	0.0	0.0	0.0	1.9	1.7	0.0
日 本	0.0	0.0	0.0	0.0	2.9	0.0	1.7	3.0
ベルギー	0.0	4.2	0.0	2.3	0.0	0.0	0.0	3.0
そ の 他	2.8	0.0	6.1	0.0	11.4	3.7	5.1	3.0
N (= 100%)	36	24	33	43	35	54	59	33

資料：表1と同じ。

～3割を占有したドイツ，1910年代まで2割を占有したフランスはその後それ以上の成果をあげることなく後退した。これに比して米国は今世紀初頭わずか5%にすぎなかった占有率が上昇し，30年代に42%に達しドイツに代って科学界をリードすることになった。50年代に市場占有率が過半数の56%に達した。最近の10年間もあと5年間を残す時点で49%と著しく高率であるため，恐らく古い記録は更新されるであろう。

漸次上昇傾向を示している英国は別として，欧型よりも米国型の大学制度・組織のほうが科学者の生産性・創造性において大きな成果を発揮している。日本は戦前欧型，戦後米国型を輸入したが，ノーベル賞を基準にするかぎり日米格差は著しく大きく，創造力に富む研究者，学者，科学者の養成の点での立遅れは歴然としている。これは主要には大学制度，とくに大学院の立遅れに起因すると思われる。少なくとも以上のような国際比較をするとき研究者，学者，科学者の教育や養成のあり方と，それに最も主要にかかわる機関としての大学院の問題はこれからの日本の高等教育が直面するきわめて重要な問題の一つであるといつてよい。⁴⁾それにもかかわらず，これらの問題に十分な学問的成果がみられないのは，「研究者の研究」あるいは「科学の社会学」が十分に発達していないことに関係するといえることができるだろう。

小論は上述の目的のもとに，米国の大学院の社会学教授市場における成層を分析するなかで，米国の大学市場が日本と比較してどの程度開放的であり，またそれがどの程度学問的生産と関係するかを具体的に考察したい。結論的には，構造上で日本と同様の閉鎖性が存在す

るが、内容的には相当の差異が存在すること、つまり垂直移動や水平移動を不断に可能にする開放性志向の市場原理がつよく作用していることが認められる。

1 大学教授市場の成層

(1) **大学の質の評定** リースマンが「大学の行進」(academic procession)と表現したように⁵⁾、米国の大学市場は種々の目的、プログラム、質をもつ大学から成り立つ多様性を特色とする。私立大学、公立大学、私立カレッジ、公立カレッジ、コミュニティ・カレッジなどの多様なセクターも個々の大学も多様な大学市場のなかで不断の自由競争を展開している。クラークらの分類に従えば⁶⁾、私立大学は威信が高く全国志向の「研究中心大学」(research-centered university)、威信はあまり高くなく地方志向の「世俗的都市的大学」(secular urban-based university)、威信は高くなく地方及びキリスト教志向の「カトリック大学」など、私立カレッジは上位大学とはりあう世俗的な「リベラル・アーツ・カレッジ」、宗教性をもつ中位程度のカレッジ、大学認可水準すれすれの、優秀な高校よりも質的に劣るカレッジなどが存在する。同様に公立セクターも目的、プログラム、学問的質の異なる州立大学、州立カレッジ、コミュニティ・カレッジなどが存在する。このような多様性を特色とする大学市場では、大学の格差を否定したり黙認したり、格差をつくらないように市場の力学がはたらくよりも、むしろそれを公表して大学間の競争を刺激する方向に力学がはたらく。大学入試委員会(CEE B)、教育審議会(American Council on Education)、あるいは市販の年鑑などの大学の格づけの公表は、序列化を排除するよりも積極的に序列をつくり、それに基づき市場全体の質の向上をはかる慣行の定着していることを示すといえるだろう。

質の評定によってつくられる大学格差はきびしい階層分化を呈する。例えば、カレッジ・レベルの評定を市販の年鑑(1977年版)⁷⁾によって調べると、入学時及び入学後の難易度(米国では入学後がむしろきびしい)に基づき格づけが行なわれているが、これを集計整理すると次のようになる。「最高に競争的」36校(2.6%)、「著しく競争的」46校(3.4%)、「非常に競争的」33校(2.4%)、「競争的」102校(7.5%)、「ある程度競争的」250校(18.3%)、「その他」903校(66.0%)。頂点の尖鋭な底辺の広いピラミッド状の垂直的階層分化が歴然と存在していることがわかる。

小論の考察対象となる大学院大学は上記分類に従えば、威信の高い、全国志向の研究中心大学であるが、そこにも同様の市場原理が作用し垂直分化が当然認められる。表3は大学院の授与する学位(修士・博士号)数と「博士号取得研究員」(post-doctorals)の受け入れ数の多い大学を基準に第30位までの大学別順位を示したものである。ハーバード、ウィスコンシン、バークレー、イリノイ、スタンフォードなどが上位群を形成している。一般に私立大学よりも州立大学のほうが学位授与規模の大きい大学が多いためか、上位10大学の中に州立大学6校が入り公立セクターの比重がやや大きい。しかし20位まででは両セクターの比率は半々、

表3 大学院の学位授与者数と博士号取得研究員数
 において指導的な30大学 1967 - 68

大 学 名	設置者別 (*は私立)	A. 累 積 (B-D) 占 有 率 順 位 (%)	B. 修士号取得者(177,150) 中 占 有 率 順 位 (%)	C. 博士号取得者(23,091) 中 占 有 率 順 位 (%)	D. 博士号取得研究員(8,654) 中 占 有 率 順 位 (%)
ハーバード	*	1 5.87	12 0.90	4 2.46	1 7.21
ウィスコンシン		2 4.28	6 1.21	1 3.10	3 3.41
バークレー		3 4.02	9 1.10	2 2.92	6 3.22
イリノイ		4 3.76	4 1.40	3 2.69	9 2.71
スタンフォード	*	5 3.35	11 0.91	7 2.12	7 3.00
ミシガン		6 3.20	2 1.90	6 2.37	19 1.49
ミネソタ		7 3.12	17 0.80	8 2.12	10 2.71
エーテル	*	8 2.91	43 0.27	24 1.20	2 3.77
UCLA		9 2.86	10 1.00	12 1.91	15 2.25
MIT	*	10 2.86	32 0.41	17 1.52	5 3.22
NYU	*	11 2.79	1 1.91	13 1.91	26 1.21
シカゴ	*	12 2.74	15 0.80	19 1.42	8 2.71
ジョンズ・ホプキンス	*	13 2.61	41 0.34	31 0.95	4 3.41
コロンビア	*	14 2.60	8 1.11	5 2.37	25 1.21
コーネル	*	15 2.54	33 0.41	14 1.75	12 2.42
インディアナ		16 2.51	3 1.51	11 1.95	31 1.07
ミシガン州立		17 2.49	5 1.31	9 2.00	29 1.18
ペンシルバニア	*	18 2.49	13 0.90	22 1.23	13 2.34
テキサス		19 2.36	37 0.40	16 1.56	14 2.30
オハイオ州立		20 2.24	14 0.81	10 1.98	23 1.25
ワシントン(シアトル)		21 2.14	16 0.80	21 1.26	17 1.80
パーデュー		22 1.89	20 0.70	15 1.75	32 0.96
ノースウェスタン	*	23 1.85	22 0.61	20 1.29	21 1.44
USC	*	24 1.82	7 1.20	18 1.48	38 0.60
C.W. リザーブ	*	25 1.78	28 0.51	29 1.02	18 1.68
カリフォルニア工科	*	26 1.73	50 0.07	49 0.47	11 2.58
デューク	*	27 1.64	47 0.16	41 0.79	16 2.01
ノース・カロライナ		28 1.61	31 0.50	32 0.92	20 1.49
ピッツバーグ	*	29 1.56	19 0.77	39 0.80	24 1.25
プリンストン	*	30 1.40	48 0.16	30 0.99	22 1.37

出所：Leonard J. Kent & George P. Springer (eds.), Graduate Education Today and Tomorrow, University of New Mexico Press, 1972, p.p. 93-94 より。

30位まででもほぼ半々となっている。これは量的に公私の均衡がうまくとれているといえよう。10位までに公立セクターの比重が大きいのは量的側面が質的側面より強く作用しているため、これを質的側面を中心にした成層で見ると私立セクターの比重が大きくなる。例え

ば、博士号が学者としての出発の際キャリア化されている米国の大学市場では、博士号取得研究員の受け入れ大学は重要な意味をもち、受け入れ数の多い大学は質的に高く評価されている。その点で先の表を再考すると、ハーバード、エール、ウィスコンシン、ジョンズ・ホプキンス、MIT、バークレー、スタンフォード、シカゴ、イリノイ、ミネソタが上位10大学を形成し、私立の比重がやや大きくなる。

表4は1970年に発表された大学院の分野別教員の質評定の結果を示す。人文科学10分野、

表4 大学院教員の質評定による大学の格づけ
(各分野で5位以内を集計) 1970

大 学 名	設置者別	総合順位	総合得点	1位	2位	3位	4位	5位	計	(順位)
バークレー		1	113	8	10	8	3	3	32	1
ハーバード	*	2	99	14	5	3	4	2	28	2
エール	*	3	44	5	2	1	4	0	12	5
スタンフォード	*	3	44	2	4	2	5	2	15	3
カリフォルニア工科大学	*	5	37	4	2	1	2	2	11	8
シカゴ	*	6	36	3	0	2	5	5	15	3
MIT	*	7	35	4	1	1	2	4	12	5
プリンストン	*	8	30	1	2	3	3	2	11	8
ミシガン		8	30	1	3	2	1	5	12	5
ウィスコンシン		10	17	1	0	2	1	4	8	10
ロックフェラー	*	11	16	2	1	0	1	0	4	13
コロンビア	*	12	14	0	2	1	1	1	5	12
イリノイ		12	14	0	2	0	2	2	6	11
ミネソタ		14	13	1	1	1	0	1	4	13
コーネル	*	15	8	0	1	1	0	1	3	16
テキサス		15	8	0	1	1	0	1	3	16
ペンシルバニア	*	17	7	0	0	0	3	1	4	13
アイオワ(市)		18	5	1	0	0	0	0	1	18
UCLA		19	4	0	1	0	0	0	1	18
カリフォルニア(デービス)		19	4	0	1	0	0	0	1	18
インディアナ		21	3	0	0	1	0	0	1	18
ワシントン(シアトル)		21	3	0	0	1	0	0	1	18
ジョージア		21	3	0	0	1	0	0	1	18
ピッツバーグ	*	21	3	0	0	1	0	0	1	18
カリフォルニア(リバーサイド)		25	2	0	0	0	1	0	1	18
デューク	*	25	2	0	0	0	1	0	1	18
ノース・カロライナ		27	1	0	0	0	0	1	1	18

(註) 1. 設置者の*印は私立大学。

2. (順位)は計に基づく。総合順位は総合得点に基づく。総合得点は1位(5点)、2位(4点)、3位(3点)、4位(2点)、5位(1点)で計算したもの。分野(学科)名については表8参照。

3. 資料: Kenneth D. Roose & Charles J. Andersen, A Rating of Graduate Programs, American Council on Education, 1970, より作成。

表 5 大学院社会学科の格づけ (1925 - 70)

大 学 名	設 置 者 別	最初の PhD 授与年	教員数 (1975)	学 生 定 員 (1975)	PhD 授与数 (1973 -74)	社会学科の格づけ			
						1925	1957	1966	1970
バークレー		b	25	110	20		6	1	1
ハーバード	*	a	12	70	14	6	1	2	1
シカゴ	*	b	13	133	18	1	3	4	3
コロンビア	*	a	17	143	14	2	2	3	4
ミシガン		a	29	160	22	5	4	5	4
ウィスコンシン		b	57	190	25	3	12	6	6
ノース・カロライナ		b	21	74	5	9	8	10	7
ULCA		d	27	97	6		11	11	8
コーネル	*	a	14	50	9	12	5	7	9
ジョンズ・ホプキンス	*	a	10	34	11			20	9
ノースウェスタン	*	b	16	46	20		13	14	9
プリンストン	*	a	12	32	6			8	9
ワシントン(シアトル)		c	27	90	6		9	13	13
エール	*	a	16	65	7	10	10	15	13
ミネソタ		b	32	65	17	4	7	9	15
スタンフォード	*	c	11	67	6			12	15
ミシガン州立		d	26	93	9			17	17
テキサス		c	29	122	13			19	17
インディアナ		b	34	98	10			18	19
ブランダイス	*	d	14	43	7				20
ペンシルバニア	*	b	34	116	13	8	15		20
ブラウン	*	b	18	71	5				22
デューク	*	d	16	36	3				⋮
イリノイ		c	45	111	3	11			⋮
MIT	*	c	⋯	⋯	⋯				⋮
NYU	*	b	16	55	12				⋮
オレゴン		d	17	62	7				⋮
USC	*	d	23	82	8				⋮
ヴァンダビルド	*	a	20	43	10				⋮
ワシントン(セントルイス)	*	b	18	45	7				30

- (註) 1. *印私立大学。最初のPh.D授与年(社会学とは限らない)の区分はa(1880年まで), b(1881~1900), c(1901~1920), d(1921年以降)。
2. 格づけ表の空白部分はその年にランクされていないことを示す。1925年にはミズリー(7位), オハイオ州立(13位), プリン・モウア(14位)がランクされている。1970年のブラウンからワシントンまでは22位以下の9大学で順序不同。
3. 資料: Robert Quick (ed.), A Guide to Graduate Study, American Council on Education, 1969, The American Sociological Association, Guide to Graduate Departments of Sociology, 1975, Kenneth D. Roose & Charles J. Andersen (表4と同じ), Allain M. Cartter, An Assessment of Quality in Graduate Education, American Council on Education, 1966, より作成。

社会科学7分野、生物科学10分野、物理科学5分野、工学4分野、合計36分野のいずれかの分野のなかで、第5位以内に評定された大学を高得点順に配列したところ、バークレーは32分野、ハーバード28分野、シカゴ、スタンフォード各15分野、エール、MIT、ミシガン各12分野でそれぞれ5位以内に入っていることがわかる。これを総合得点によって格づけすると、バークレー、ハーバード、エール、スタンフォード、カリフォルニア工科大学、シカゴ、MIT、ミシガン、プリンストン、ウィスコンシンとなり、10位までに私立7校が入る。質的な評定による社会成層では私立セクターが圧倒的に上位を占有することが認められる。

社会学分野に限定した大学市場の階層分化を考察したばあいも以上の全体市場の状況と類似した結果が得られる。まず、社会学の学位を授与する大学院195校の中、博士号と修士号の両方を授与するのは112校(57.4%)、修士号のみを授与するのは83校(42.6%)という構成になっている。⁸⁾次に学生定員の大きい大学を列挙すると、ウィスコンシン(190)、ミシガン(160)、コロンビア(143)、コロラド(133)など。また、専任教員数の多い大学は、ウィスコンシン(57)、イリノイ(45)、インディアナ、ペンシルバニア(以上34)、コロラド(33)、ミネソタ、ラトガース(以上32)など。(表5参照)。このように学生数や教員数など量的規模による成層では概して公立セクターが上位群を形成している。しかし表5に示されるように、社会学科教員の質評定を基準にした格づけ成層でみると、バークレー、ハーバード、シカゴ、コロンビア、ミシガン、ウィスコンシン、ノース・カロライナ、UCLA、コーネル、ジョンズ・ホプキンス、ノースウエスタン、プリンストンの上位12校のなかに私立7校、州立5校が位置づき、私立セクターの比率がやや大きくなることがわかる。以上に考察したように質的評定では私立大学がやや優勢に上位集団を形成する形態の成層が存在する。

(2) 質評定の重視 このような成層の垂直分化は階層社会では自然発生的に生じる現象ともいえるが、米国大学市場では大学の質や教員の質を評定して、意図的に成層化を追求しているといえる。なぜ質の評定を重視するのであろうか。理由の第一は研究・科学主義の価値観の確立が考えられる。19世紀後半、アメリカの学生がこぞって世界的な学問の中心地であるドイツに留学した頃、ニューイングランドのアイビー・リーグを中心にした大学の社会成層が形成されていた。これらの大学(カレッジ)はほぼ第二次世界大戦後まで米国の代表文化を方向づけた、エリート層を再生産する特権的な教育機関であった。ドイツのギムナジウムに相当すると考えられたこれらのカレッジは、科学・研究を主眼とした組織であるよりも、社会的、文化的威信の形成を主眼としたものであったが、それだけに上流階層を中心とした学生や教員をひきつける威信(prestige)を確立していた。これらアイビー・リーグの威信尺度が適用されるかぎり、大学市場に遅れて登場した新興大学は底辺に位置づけられることになるのは当然の結果であった。かくして新しい威信尺度を模索する新興大学によって、旧カレッジの威信を凌駕すること、しかもドイツの科学水準に到達することという概念が結合し、研究・科学主義の威信尺度が導入されることになった。⁹⁾当然の帰結として大学教授の質、大

学のプログラムの質、研究の質が重視されることになった。

第二には、研究・科学主義の導入が古い、リベラル・アーツや一般教育を主としたカレッジとは別個の研究を主とした大学院(graduate school)の制度的発明を可能にしたことである。研究・科学主義の威信尺度もしくは理念と制度の結合がそこにある。1876年にドイツ大学を模範として創設された「大学院大学」「研究志向大学」としてのジョンズ・ホプキンスのなかにその結実を見出すことができる。そしてそこにドイツ大学のように大学院をもたない「一階建のシステム」(one-tier system)に代わって「二階建のシステム」(two-tier system)¹⁰⁾を確立し、大学構造の垂直分化を実現したアメリカの制度的発明がある。これは二つの点で重要である。一つはすでにカレッジ建築が完全に発展していたことが偶然にも新建築発明の動因となったとはいえ、その後の米国の科学発展を約束し、同時に高等教育の大衆化に先きがけ一般教育をカレッジで専門教育を大学院で行なうことによって多様な教育要求に対応する構造を早々と構築したこと。二つは、新しい威信尺度を採用して大学市場の上層に浮上しようという野心をもつ新興大学にとって、ジョンズ・ホプキンス型の大学院大学志向は当然の帰結となったこと、である。大学院志向は研究を中心とした質の向上を不可欠の課題とすることになり、やがて専門家による質の評定を不可欠とすることになった。

第三に、学科システム(department system)の発展が考えられる。ドイツ大学の研究水準の高さは、組織的には決して大学の一部にならなかったが科学的には大学のなかで最も活気に満ちた場所としてアメリカの留学生によって評価された実験室(institut)の貢献に負うところが大きい。ドイツ大学の講座制と実験室のシステムをそのまま移植するのではなく上述の研究・科学主義に最も適した形の学科システムを発展させながらドイツの長所を導入したところに米国の独自性がある。1825年にハーバードに存在していた学科が1900年には全国的に定着することになった。¹¹⁾この学科制の特徴は講座制と異なり、新しい学問の専門分化に対応できる柔軟性をもち、知識の保存や伝達よりも知識の生産に適したシステムであるため、学問的生産競争を促進する。¹²⁾大学の質的向上を旨とする大学は新しい学問分野に対応した特定の学科の質の向上が先決であると考えるのはこのような学科システムの特徴に起因する。かくして学科レベルの質の競争が生じ、学科の質(学科を構成する教員の質)の評定が重視されることになる。そのため学科(ないし教員)の質を規定する業績発表の機関(学術雑誌、大学出版会など)、業績評定機関(学会)、業績発表を経済的かつ時間的に可能にする方法(サバティカル・イヤーズ)などが同時に開発され発展することになったのである。¹³⁾

2 大学教授市場の閉鎖的構造

以上の要因が作用しつつ確立されたピラミッド型の大学市場の成層を構造的にとらえるとき、日本的な閉鎖社会構造を連想せざるを得ない。日本の大学市場では質の異なる大学間の教員の移動は系列校と親大学の間で生じる以外あまり生じないし、それと同時に大学の地位

の上下移動もほとんど生じることはない。米国の大学市場も日本と同様のピラミッド状を呈する以上、閉鎖的構造である点に変わりはないであろう。表6は博士号を授与する大学を質的

表6 博士号授与大学出身者の雇用市場 1973 (%)

雇用機関の類型	博士号授与大学の類型					全大学
	I	II	III	IV	V	
A (I)	10.9	2.1	0.5	0.4	0.2	2.2
B (II)	12.6	13.1	3.5	1.5	1.1	6.5
C (III + VI)	19.2	12.2	13.2	3.3	2.4	10.1
D (IV + VII)	23.8	23.7	21.5	22.1	12.1	21.5
E (V + VIII)	19.1	23.7	25.2	23.1	28.3	23.9
F (IX + X)	9.2	17.4	25.3	36.1	38.6	25.2
G (XI + XII)	5.1	7.8	10.7	13.5	17.3	10.6
計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

(註) 1. I (上位10大学), II (次の上位20大学), III (その次の上位35大学), IV (その次の上位69大学), V (残りの118大学), VI (上位36カレッジ), VII (次の上位153カレッジ), VIII (その次の上位249カレッジ), IX (その次の上位466カレッジ), X (残りの617カレッジ), XI (2年制カレッジ), XII (初等・中等学校)。

2. 出所: Allain M. Cartter, ph. D.'s and the Academic Labor Market, McGraw-Hill Book Co., 1976, p. 202.

に五段階に類別し、各類型の博士号取得者がどのように各類型に配分されるかを示したものである。これによると、I型はA型(10.9%), B型(12.6%), C型(19.2%), D型(23.8%), E型(19.1%), F型(9.2%), G型(5.1%)の割合で分配している。D型の分配比率が最大、C型、E型がそれにつづく。I型からA型への配分は10.9%であるから、同等以上への上昇移動の機会が少なく、圧倒的多数は下降移動をせざるを得ない。しかし全体の大学からのA型への配分率の平均は2.2%にすぎないから、I型は平均の5倍も強力にA型への配分を自給することになる。他大学群からA型への配分率はII型(2.1%), III型(0.5%), IV型(0.4%), V型(0.2%)と著しく少ない。これをA, B, C型を加算した割合でみると、I型42.7%, II型27.4%, III型17.2%, IV型5.2%, V型3.7%となり、逆にE, F, G型を加算した割合でみるとI型33.4%, II型48.9%, III型61.2%, IV型72.7%, V型84.2%となる。この結果は明らかに大学市場の人材配分が大学格差に対応し、上位校ほど上位市場を占有し下位校は上位校の進出しない下位市場を占有することを示している。総じて市場の人材配置構造は大学格差に対応して定形化された閉鎖的構造をもつといわなければならない。ベレルソンの指摘したように、上位大学群の卒業者が上位大学群の大学市場を占有する「同系繁殖」(inbreeding)が認められる¹⁴⁾。つまり、複数の大学による自校閥現象と系列校化現象の存在することを否定することはできない。

以上の点を先述の社会学分野で登場した上位21校を事例にして少し詳しく考察してみよう。

表7は各大学群の大学群別出身者の採用率を示す。これによると上位5大学は同じ上位5大学から68.8%自給し、残りを12大学(14.6%)、21大学(4.2%)、その他の大学(6.3%)、

表7 大学群別市場の大学群別出身者のリクルート率 1975(%)

出身校		A	B	C	D	E	N (=100%)	A+B+C
市場		上位5校	上位12校	上位21校	その他	外国		
上位5校	教授	80.9	4.3	2.1	2.1	10.6	47	87.2
	准教授	61.1	16.7	5.7	16.7	0.0	18	83.3
	助教授	54.8	29.0	6.5	6.5	3.2	31	90.3
	全体	68.8	14.6	4.2	6.3	6.3	96	87.5
上位12校	教授	54.9	18.3	11.3	12.7	2.8	71	84.5
	准教授	43.8	15.6	28.1	12.5	0.0	32	87.5
	助教授	37.0	31.5	13.0	18.5	0.0	54	81.5
	全体	46.5	22.3	15.3	14.7	1.3	157	84.1
上位21校	教授	32.6	23.2	23.2	19.0	2.1	95	79.0
	准教授	46.0	16.2	18.9	18.9	0.0	37	81.1
	助教授	37.4	26.4	19.8	15.4	1.0	91	72.5
	全体	36.8	23.3	21.1	17.5	1.4	223	81.2

(註) 1. 上位5校(表5のバークレーからミシガンまで)、上位12校(同ウィスコンシンからプリンストンまで)、上位21校(同ワシントンからペンシルバニアまで)、その他(上記以外で外国を除くすべての大学)。

2. 資料: The American Sociological Association, Guide to Graduate Departments of Sociology, 1975,より集計作成。

外国の大学(6.3%)の割合で補充している。圧倒的に同一大学群からの自給率が高く、「自校閥現象」を呈している。とくに正教授の自給率(80.9%)は准教授(61.1%)、助教授(54.8%)に比較してはるかに高く、下位職階の教員ポストを他大学にある程度開放しても正教授のポストはほとんど開放していない。

これら21校のなかからの教員採用率は上位5校(87.5%)、上位12校(84.1%)、上位21校(81.2%)と8割から9割に達する。カーターの作成した表6と同様¹⁵⁾、自校同等以上の質の大学から教員を採用する傾向はきわめて強い。上位5校は68.8%、上位12校は上位5校46.5%、上位12校22.3%で計68.8%、上位21校は上位5校36.8%、上位12校23.3%、上位21校21.1%で計81.2%とそれぞれ同等以上の大学の出身者を採用している。上位12校までの出身者を採用している大学のうちその割合の大きいのは、エール(93.8%)、ミシガン(93.1%)、ブランダイス(92.9%)、スタンフォード(90.9%)、バークレー(88.0%)、コーネル(85.7%)、シカゴ(84.6%)、コロンビア(76.5%)など。最も威信の高い上位5大学出身者の採用率の高い大学は、ブランダイス(85.7%)、シカゴ(76.9%)、バークレー(76.0%)、ミシガン(69.0%)、コロンビア(64.7%)、スタンフォード(63.6%)、エール(62.5%)、ノース・カロライナ(52.4%)、ハーバード、プリンストン(各50.0%)

など。威信の高い大学の教員は実質的に上位大学の出身者であるという「系列校化現象」が得られる。

ピアソンは米国の各界指導者に特定大学出身者が強力な比重をもつ事実を明白に示し、とくにハーバード、エール、プリンストンなどの伝統校は大量の指導者を輩出したことを例証した。¹⁶⁾これは米国社会が大卒という肩書きを有利なもののみならず学歴社会であり、かつ特定大卒が有利な学閥社会であるという、日本と同様の現象が存在することを意味しているといわざるを得ない。それが ph.D がキャリア化された典型的な高学歴社会である学者の社会において顕著に表われ、特定大学卒が重視される学閥傾向がそこに認められるとしても不思議ではない。

3 大学教授市場の開放的性格

しかしながら以上の結果をもって米国の大学市場は「学閥社会」であり「同系繁殖社会」であると即断することはできない。なぜなら日米にかぎらず学者社会という高学歴社会では学歴や特定大学出身者による社会成層化はある意味で回避できないからである。質的に高い大学の出身者が市場において有利な地位を占有することは、実力が地位を形成することを否定できない以上当然であろう。学閥社会の問題はむしろ地位が実力を形成することになるという実力と地位の逆転した関係にあることはいままでの間もない。そこで一種の学閥社会的成層化を回避できないとすれば実力を不断に評定する装置と地位の固定化を抑制する装置を構造内に内包するか否かは重要な問題となる。前者の実力評定装置については大学の質評定のところで触れたので、ここでは後者の地位流動化装置について述べてみよう。(実はこの前者と後者の関係は密接に関連していることは後述するとおりである。)

日本の大学市場は東大一校で市場の25%を占有するという事実があるが、¹⁷⁾単独の大学がこのように大きな勢力をもたず、また質の高い大学が相互に垣根を作って交流しない日本の市場の特徴に対して積極的に相互交流し市場の閉鎖性を常時抑制するメカニズムが米国市場でははたらいっている。彼我の顕著な差異はこの開放性志向の有無にある。

(1) 垂直移動 まず、大学市場の成層が一定の固定化傾向を強くもつとはいえ、決して確固不動の状態に固定しているのではなく流動的な点に注目してみよう。表5を詳細にみると序列の入れ替え、新旧勢力の交替が微妙に生じていることが認められる。パークレー、UCLA、ジョンズ・ホプキンス、ノースウエスタンが上昇傾向にある反面、ミネソタ、ペンシルバニアが下降傾向にある。コロンビアもやや下降線をたどっている。この変化は地位の序列自体が不変的なものでなく時間的に推移変動することを物語っている。もちろん、この45年間常時最高位を維持している大学学科もないのではなく、例えば、ハーバードは図1に示されるように、歴史学科で不動の座を確立してきた。しかし最も威信の高い大学とされるハーバードでさえ、すべての学科で最高位を独占することはできない。1970年時の36学科についてい

えば14学科で最高位を占めたにすぎない。(表4と表8参照)。

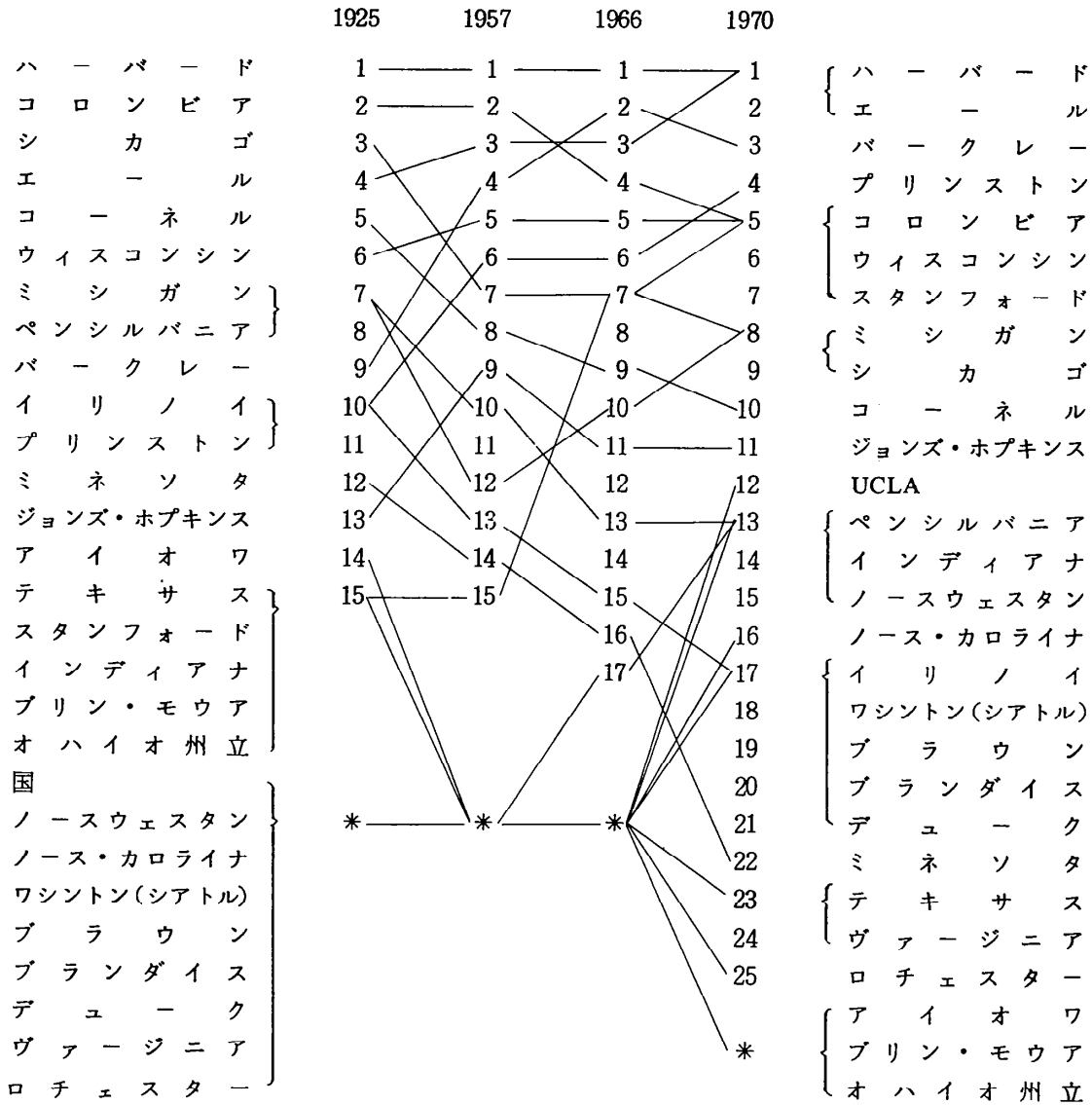
ある意味ではハーバードを凌駕しているバークレーも、社会科学を事例にするとき、最近の急速な躍進によって上昇移動したことがわかる。1925年時の第14位までの格づけにバークレーは入っていない。(表5)。ウイルソンが1920年代から30年代の資料に基づいて20学科の評定を行なったとき、博士号を授与する上で「秀」15, 「適当」2, 「不適当」1と判定しているが、この不適当な学科1というのが社会科学であった。¹⁸⁾しかし、1957年時評定で6位に登場し、その後1966年に最上位に躍進したのである。

歴史学科の例でも、コロンビア、シカゴ、コーネル、ペンシルバニア、イリノイ、ミネソタなどは後退しつつあるのに対して、エール、バークレー、プリンストン、スタンフォード、UCLAなどは上昇している。(図1)。このような質の上下移動、換言すれば大学市場成層の垂直的移動は、大学院が研究を中心に競争を展開し、優秀な研究成果をあげた大学学科が評価されるという実力評定装置あるいはレフ

表8 大学院教員の学科別質評定において最上位に格づけされた大学(1970)

(学 科)	(大 学 名)
人文科学	
美術史	NYU
古典語	ハーバード
英語	エール
仏語	エール
独語	バークレー
言語学	MIT
音楽	ハーバード
哲学	プリンストン
露語	ハーバード
西語	ハーバード
社会科学	
人類学	シカゴ
経済学	ハーバード MIT
地理学	シカゴ
歴史学	ハーバード エール
政治学	エール
心理学	スタンフォード
社会学	バークレー ハーバード
生物科学	
生化学	ハーバード
植物学	バークレー
発達生物学	カリフォルニア工科大学
昆虫学	バークレー
微生物学	ロックフェラー
分子生物学	ハーバード
薬学	アイオワ(市) ミネソタ スタンフォード エール
生理学	ハーバード ロックフェラー
人口生物学	シカゴ ミシガン
動物学	バークレー ハーバード
物理科学	
天文学	カリフォルニア工科大学
化学	ハーバード
地学	カリフォルニア工科大学
数学	バークレー ハーバード
物理学	バークレー カリフォルニア工科大学 ハーバード
工学	
化学工学	ウィスコンシン
土木工学	バークレー
電気工学	MIT
機械工学	MIT

資料：表4と同じ資料より作成。



(註) 1. *印はその年度にランクされていない。
 2. 資料：表5と同資料より作成。

図1 大学院歴史学科の格づけ順位の推移 (1925 - 70)

エリー・システムが確立されている大学市場では起るべくして起る現象である。逆に、地位が実力を形成し、このような評価原理が十分に確立されていないか、あいまいな大学市場では同様の現象を可視的に把握することはできない。

研究業績(achievement)によって優劣が判定される以上、質の変動は当然生じざるを得ない。つまり家柄や身分や財産など帰属的地位(ascribed status)によって測定される優劣ならば、現在よりも過去の事実が重要であり現在の努力によってそれを変更することは困難か不可能で

ある。封建社会のように出自によって社会的地位が決定されてしまう。これに対して何ができ得るかという達成的地位(achieved status)によって評価が行なわれるとき、何かできる力、つまり実力は個人的にも制度的にも一定しない。個人の実力は年齢や環境条件によって変化し、制度の実力はそのような個人に刺激を与え、最高の実力を発揮させ得るように仕向けるときは上昇するが、それに失敗すれば下降する。したがって優秀な人材を集め、適切な環境条件を装置した学科の学問的生産性は高揚するだろうし、それに失敗すれば不振に陥いるだろう。いったん地歩を確立した大学はそれを不動のものにしようと試み、またハロー効果の恩恵も受けるが、それ以上に後発大学が条件をそろえれば先発大学を追い越すことはむつかしくない。かくして、学問生産性の高い大学、研究活動に活気のある大学、あるいは創造性に富む大学は一定の大学に固定することなく漸次移行することになる。上述のような垂直移動は米国の大学市場では理論的にも実際的にも明白に生じるのである。

(2) 水平移動 階層の垂直分化は永続的に固定したものであるよりも、教員の質およびそれに伴う制度の質が時間的に推移変動することを考えると強固に見える成層構造の再編成も漸次生起する。この階層の垂直分化の新陳代謝によって質的上位大学群の再編成が生じる。その過程において質の高い全国志向大学は相互に人材を供給しあい、人材のスカウト合戦を展開するから、唯一の大学が特別に優秀でその他は駄目という現象は起らない。少なくともこれら人材を交換しあう大学間では非常にかげ離れた形での質的分解は生じ難い。上述したように、上位5大学をはじめ12大学、21大学における人材供給源の大学は上位大学群を軸にしたきわめて類似した形態を示す点にその事実が示されている。この一種の系列校化現象は視角を変えると、上位大学出身者の下降移動である。この下降移動はこれらの学者を採用する下位大学にとっては自校教員の質の上昇ひいては大学自体の上昇移動を結果することになる。したがって米国大学市場には特定の一つまたは二つの大学が高くそびえるのではなく、複数の大学が不断に同格的な峰を形成するという構造が成立する。以上から米国大学市場には垂直的階層分化と水平的階層分化を促進する地位流動化装置が研究主義の実力評定装置を基軸に作用することによって複数の同格的大学を繁殖させていると考えられる。その地位流動化装置のひとつは大学市場の人材配置構造の中に存在するところの同系繁殖を極力抑制する制度的慣行であるといっておかろう。

表9に示されるように、上位5大学の自給率は25.0%にすぎず、12大学12.1%、21大学6.3%にすぎない。自給率の高くなる終身職(tenure)の准教授と正教授でも順に29.2%、9.7%、9.1%にすぎない。正教授だけでも順に29.8%、11.3%、11.6%にすぎない。正教授の自給率を大学別にみると、シカゴ(57.1%)、ミシガン(44.6%)、ペンシルバニア(38.5%)、ジョンズ・ホプキンス(33.3%)、ハーバード(25.0%)、コロンビア(25.0%)、エール(20.0%)、ノース・カロライナ(20.0%)等の順で、概して威信の高い大学で自給率が高い。しかし正教授層でやや自給率が高まるとしても日本の大学のように95%とか100%といった数字を見出すことはできない。正教授の自給率が最大のシカゴでも教員全体の自

給率は13名中4名(30.8%)にすぎず、ペンシルバニア34名中5名(14.7%)、ジョンズ・ホプキンス10名中2名(20.0%)と同様に低率である。

この同系繁殖の抑制もしくは禁止は、研究主義の発展と呼応して発展した原理である。その証拠に、研究中心の威信尺度が未だ十分に定着していない今世紀の初頭では自校閥傾向は強かった。

例えば、ホリングスヘッドの1938年時におけるインディアナ大学の1885年から1937年までの教員を調査した事例では、802名中344名(42.9%)が同系繁殖であったと報告されている。¹⁹⁾

ところで、質のきわめて高い大学ですらほぼ30%以下に自給率が抑制されなければならない大学市場の原理は、質の高い大学の出身者をそれよりも質の低い大学へ輸出しなければならないという原理をうむ。下降移動である。この垂直移動は複数の同質的大学を形成する方向に作用する。フランクリンらは1967年と1970年を比較して質の高い大学の低い職階(例えば准教授)から質の低い大学の高い職階(例えば教授)への移動が頻繁に生じることを実証している。²⁰⁾この傾向は、同系繁殖の抑制という圧力が垂直移動の機会を開くと同時に同質の複数の大学をうむ方向で作用すること、さらには同質大学間の水平移動の機会を頻繁に生じさせる方向に作用することを意味する。実際、この方向での圧力は時間とともにかなり広範囲の高度の等質化を伴う大学市場を形成した。ここでの考察対象である上位5大学をはじめ21の大学は、そのようにしてできた多少上下の格差はあるとしても等質的な大学群であって、いわゆる複数の峰々である。これら大学相互間の人材の相互交換は日本の大学で生じる系列校間の垂直移動であるよりも、実力の伯仲した大学間の水平移動である。米国大学市場では垂直移動の可能性とともに水平移動の可能性を開く方向に市場の装置が作用しているのである。

(3) 異系繁殖 上位5大学間に限定して水平移動の実態を具体的にみてみよう。上位5校全体で教員ポストが96あり、そのうち47が正教授のポストである。上述の質比較から考えて、これらのポストは現在の米国大学市場における社会学者の最高の地位を形成しているといつてよい。限定された地位だけにきびしい地位獲得競争が展開されることは必然的である。もちろん、米国の大学教授のポストは講座制のように定員制をもたないオープン・アポイントメント・システム(open appointment system)のため、数の変動は常に生じるが、それでも稀少価値をもって限定された数であることに変わりはない。これらのうち、9ポストは5大学以外に開放され、残り38ポストがこれら5大学で配分されている。5大学間で全く互格の水平移動が生じていると仮説すれば、算術計算によって1校当たり7.6名が配分されることになる。が、実際にはこれら大学間の勢力差が反映されていて、理論値と実際値は一致しない。つま

表 9 自給率の大学群別職階別比較 1975 (%)

職 階	上位 5 校	上位12校	上位21校
A 教 授	29.8	11.3	11.6
B 准教授	27.8	6.3	2.7
C 助教授	16.1	16.7	2.2
A + B	29.2	9.7	9.1
全 体	25.0	12.1	6.3

資料：(表7と同じ)

り、シカゴ13、ハーバード10、コロンビア6、ミシガン5、バークレー4という結果が得られる。表10によると、シカゴとハーバードは全ての大学に自校出身者を輸出しているのに対し、コロンビアは

表10 社会学教授の大学別輸出入数比較（上位5校）1975

勤務校 出身校	シカゴ	ハーバード	コロンビア	ミシガン	バークレー	計
シカゴ	4	1	1	2	5	13
ハーバード	1	2	2	2	3	10
コロンビア	1	1	2	0	2	6
ミシガン	1	0	0	4	0	5
バークレー	0	0	1	1	2	4
計	7	4	6	9	12	38

資料：（表7と同じ）

ミシガンに、ミシガンはハーバードとコロンビアとバークレーにバークレーはシカゴとハーバードにそれぞれ輸出していない。特筆すべき点はバークレーにおいて、シカゴとハーバードの勢力が大きいことである。すでに考察したとおり、もしバークレーがハーバードと肩を並べて現在質的に最上位に位置する大学であるとすれば、それはシカゴやハーバードの出身者の力に負うところが大きいことをこのことは意味している。その他の大学も大同小異で、同系繁殖を抑制することに起因する他大学出身者の採用、また彼らの貢献によって自校の質が高く評価されているのである。これはまさに文字どおり「異系繁殖」(outbreeding)といわなければならない。もしバークレーやハーバードが最上位に評定され、シカゴがそれよりも低く評定されるとすれば、それは他大学からの輸入に成功したか失敗したかの差異の反映というほかない。それほど他大学との人材交換のもつ比重は大きく、水平移動が形式的なものでなく、その実質が自校の質を規定し、質の上下移動ひいては大学の存亡をも規定する重大な影響力をもつといっても過言ではない。

いずれにしても、このような大学市場の特質は、自校出身者のみで8割以上自給し、他大学との交流は系列校間の垂直移動のみで、質的に互格の大学間の水平移動がほとんど起らない大学市場とは著しく異なる。自校のみが人材移動の閉鎖構造のなかでタコツボ式の繁栄を試みる大学市場は、等質の複数の峰々をつくる意志を最初からもたないとともに、それはつくれそうにない。このタコツボ型市場の閉鎖性は市場全体の質の向上はもとより、自己の大学の質の向上をも大局的には限定し抑制する結果になるだろう。また、学問、研究、科学中心の市場原理が開放性志向をうみ、それが逆に学問生産性、科学的創造性を惹起する方向に作用しているのが米国市場の特質であるとすれば、そのような市場原理をもたず、それゆえに開放性を志向することなく、結果的に学問生産性や科学的創造性を十分に発展させることができないのがタコツボ型市場の特質であろう。

4 社会学教授の経歴型の事例

最後に、これら質の高い大学の教授の経歴型 (career pattern) を事例的に分析し、そこに以上に考察した大学市場の実態がいかに関局的に反映されているかを明らかにしておきたい。

表11 社会学教授の経歴型の事例 (上位5校33名) 1975

整理番号	年 齢	ph. D 取得年齢	母校数	母校の型	職場数	職 場 の 型	教授就 任年齢
1	55	24	2	DA	4	GAAA	39
2	63	22*	2	EE	3	E EA	44
3	64	45**	2	AE	1	A	43
4	38	23**	1	A	4	EGGA	37
5	34	25	2	EE	3	E EA	31
6	46	26	3	DDA	4	ADGA	40
7	65	25	1	A	9	AGGGDGAAA	28
8	44	25	2	DB	5	BCDAA	33
9	57	30	2	AA	1	A	37
10	40	25	2	DA	2	AA	32
11	64	42	2	DA	3	GGA	50
12	63	36	2	EA	1	A	50
13	62	25	2	DA	8	AADGDGGA	39
14	46	33	4	ADDA	2	AA	43
15	48	29	3	DDA	5	AGABA	49
16	65	29	1	A	1	A	47
17	55	29	2	DA	5	GGAAA	42
18	55	36	2	EA	1	A	49
19	74	27	2	DA	3	DAA	47
20	60	35	2	BA	5	GGBGA	46
21	66	27	2	DA	5	DDBAA	34
22	65	22	1	E	6	EEEEEA	28
23	55	33	3	DDA	2	AA	39
24	55	28	2	DA	3	CBA	33
25	44	28	3	A EA	1	A	32
26	52	26	2	DA	5	DCAAA	37
27	56	34	2	DA	4	DBAA	45
28	54	33	2	BA	4	GGDA	44
29	45	29	2	EA	1	A	38
30	47	30	2	AC	5	ECADA	42
31	57	29	2	DD	4	DGDA	39
32	64	26	2	DA	3	ADA	30
33	58	25**	2	DA	4	BGCA	43
平均	55.0	29.2	2.1		3.6		39.7

(註) 1. 所属大学はハーバード (1~8), ミシガン (9~14), シカゴ (15~18), バークレー (19~26), コロンビア (27~33)。

2. * (学士), ** (修士)。

3. A (上位5校), B (上位12校), C (上位21校), D (その他の大学), E (外国の大学), G (会社・政府関係など)。

4. 資料: 表7と同資料および Who's Who in America 1976-77, より作成。

全体で47名の正教授の中、33名が「アメリカ紳士録」(Who's Who in America 1976-77²¹⁾)に記載されているので、これらの人々を事例とする。所属大学の内訳はハーバード(8名)、バークレー(8名)、コロンビア(7名)、ミシガン(6名)、シカゴ(4名)である。

(1) **年齢構成の多様性** 平均年齢55歳。(表11参照。以下同様)。最年長者74歳、最年少者34歳。両者とも一方は年寄りすぎ他方は若すぎる印象を与えるかもしれない。しかし、1972年現在、正教授121,065名中66歳以上5,830名(4.8%)、35歳以下1,285名(1.1%)、とくに30歳以下130名(0.1%)という統計や²²⁾年齢構成の多様化を可能にする学科制とかオープン・アポイントメント・システムの存在を考慮すると以上の結果は不思議ではない。正教授に昇任した年齢の最年少は28歳(2名)、最年長は50歳(2名)で、平均は39.7歳である。

(2) **自校閥による閉鎖的市場支配** 最終出身校(ph.D 29, MA 3, BA 1)は次のようになる。シカゴ(10)、ハーバード(7)、コロンビア(5)、外国の大学(4)、ミシガン(3)、バークレー、ペンシルバニア、ペンシルバニア州立、プリンストン(以上各1)、これら出身校を先述の質分類に従い類別すると、上位5校(78.8%)、上位12校1(3.0%)、上位21校1(3.0%)、その他1(3.0%)、外国4(12.1%)となる。この結果は先きに47名の全教授について調べたときの上位5校の輩出率(80.9%)とほぼ同様であり、自校閥的市場支配を示している。

(3) **学歴の複数性・移動性** 学歴を第1学位と最終学位との間で比較してみると、両学位を同一大学で取得した者は5名(15.2%)にすぎず、大多数の28名(84.9%)は別々の大学で取得している。これは大学構造がカレッジと大学院に垂直分化していること、カレッジから大学院への進学は同一大学ではなく別の大学に進学する慣行が定着していること、したがって複数の母校をもつことが必然的に結果していることを意味する。母校数1校は4名(12.1%)にすぎず、大多数が2校(72.7%)もち、なかには3校(12.1%)、4校(3.0%)もつものもある。平均母校数は2.1校である。日本の大学構造では理論的には2校以上の母校をもつことが学部と大学院が制度的に区別される以上、可能であるが、実際には学部と大学院の実質的分化がないため、困難である。²³⁾西欧型の「一階建システム」と米国型の「二階建システム」の差異は後者においてカレッジから大学院への垂直移動の際、大学間ならびにセクター間の実質的移動を伴うことにある。日本の現状はこの米国型を制度的に移植したものの完全な米国型ではないため、それが日米間の移動型の差異となって結果すると考えられる。米国型がはるかに開放的な移動型であることは、いま事例にしている教授の出身カレッジを類型化すると、上位5校(12.1%)、12校(6.1%)、21校(6.1%)、その他(57.6%)、外国(24.2%)となり、過半数が「その他」の出身者であることによっても示される。これは質の低い大学に入学しても質の高い大学院でキャリアとしての学位を取得する機会がかなり豊富に開かれていることを示唆するとともに実際にそれが行なわれたことを意味する。18歳時の入試である特定大学にふりわけられたら最後、他大学への移動が閉じられてしまう構造に比較してはるかに開放的であるといわなければならない。すでに考察したように、ph.D

の質による振り分けがきわめて大きいことを計算に入れても、日本よりもはるかに振り分けの時期が遅くしかも実質的移動を伴うことは否めない。

(4) **母校以外への就職** 最終学位と現在の勤務大学が同一の者は10名(30.3%)である。しかし、卒業と同時にそのまま母校に就職したが最後、一回も他へ転出した経験のない者はわずか2名(6.1%)にすぎない。もちろん母校と全く関係をもたない者は少なく大半が自己の経歴のある時点で母校に就職した経験をもつ(78.8%)。

(5) **職歴の多様性** これら正教授は平均して3.6の職場を変って現在のポストについている。具体的には勤務した職場数1(21.2%)、2~3(27.3%)、4~5(42.4%)、6以上(9.0%)という分布を示す。職場数1つという大学教授は日本の大学市場では普通に見られるのであるが、ここでは7名(21.2%)にすぎない。その内訳はシカゴ、ミシガン各2、ハーバード、コロンビア、バークレー各1である。これらの人々の中で母校も1つで、純然と唯一の大学で勉学しその母校に就職した、(恐らく日本のエリート大学に多い型の)教授はシカゴの1名を数えるだけである。米国の大学市場のなかではこのような型は例外的といわざるを得ない。

複数の職場を経験した人々はその数が多くなるにつれて、上位5大学以外の大学、会社、政府機関などに就職経験をもつ割合が高まる。そして最終経歴に近づくほど大学や機関の格が上昇し同一機関内での職階が上昇する傾向がある。また、5大学間相互の水平移動率も高まる傾向がある。表11に類別した型のなかで典型的なものを若干紹介してみると次のようになる。AA型(コロンビア→バークレー)(ハーバード→ミシガン)、CBA型(ミネソタ→UCLA→バークレー)、EEA型(外国大→外国大→ハーバード)、DBAA型(ウエイン州立→コーネル→シカゴ→コロンビア)、ADGA型(シカゴ→ワシントン→雑誌社→ハーバード)、BCDAA型(ジョンズ・ホプキンス→スタンフォード→カーネギー工科大学→シカゴ→ハーバード)など。

(6) **公募による実力競争** このような多様な移動性は講座制で起りがちな閉鎖的人事とは異なり、全国公募による人事システムを反映している。国際的人事もそこから生じる。学術雑誌、新聞などに公募されて人事が行なわれる以上、競争的な実力が要求される。その意味で複数の職場移動数は実力のあることを意味する。終身職以前に制度的に移動を余儀なくされる場合もこのような実力競争を要求されることはいうまでもない。

公募の事例・UCLA「社会学科は1978年7月1日に採用可能な助教授の空席をもつ予定。社会学の有資格者は応募されたし。専門分野は問わない。年俵は、ph. D所有者で15,700ドル前後。候補者の知的かつ学問的資質は優秀(superior)であること。就職機会均等推進雇用者(Affirmative Action / Equal opportunity Employer)。マイノリティと女性の応募歓迎。履歴書、成績証明書ならびに著作の写しを下記に送付されたし……」²⁴⁾

(7) **博士号取得研究員** 職場移動の背景には、ph. D取得後の一定期間研究活動に専念するポスト・ドクトラル・システムが半ば制度化されているが、これの経験をもち、また、各

種のフェローシップを取得した人々が多く認められる。研究者、学者の養成を制度的、経済的に条件づける背景がこれらの人々の経歴に刻印されている。国内外の大学の客員教授の経験者が多く見受けられるのもここでの特色である。

(8) 高度の学問的生産性 上記のような複数の機関を移動することは、年功序列制や終身雇用制とは異なる米国社会型の雇用条件を反映して制度的に強制される側面がある。とくに終身職を獲得するまでの若手学者は職場移動を余儀なくされる場合が多い。「出版せざる者は滅びる」(publish or perish)といわれるように、この間に研究業績をあげた人は上昇移動し、そうでない人は下降移動せざるを得ない。とくに上位5大学出身者でそのまま母校に残り終身職を与えられるごく少数の例外者は別として、大多数の人々は研究によって実力を評価されることによってのみ、母校もしくはそれと同格の大学に、彼らの経歴の後半部分において到着する。研究業績は複数の職場で競争的に評定されることにより、一種の普遍性をもつ。そこに創造的生産への圧力を突破しなければならない大学市場の期待が強く作用していることはいうまでもない。この大学市場の期待に応じて地位を形成したこれら上位大学の教授達のアカデミック・プロダクティビティはきわめて高く、その業績は最も多く引用され、最も高く他の大学の社会学者から評価されるという結果をうむ。²⁵⁾ここで分析した人々は、知名教授ばかりであり、一般の大学教授から多少ずれた経歴型をもつともいえるが、質志向および開放性原理のはたらく米国大学教授市場の特質がそこに典型的に刻印されていることも事実といえるであろう。

結 論

以上、日米比較を若干試みながら米国大学教授市場の社会成層の特質を考察した。上位大学の市場支配傾向は一種の同系繁殖、系列校化現象となって歴然と存在し、そこに学歴社会の顕著な特徴である学閥現象を看取することができた。その意味で市場構造の閉鎖性の存在を否定することはできない。しかし、単一大学が独占的に市場を支配するのではなく、複数の大学群が集散的に成層の上位を形成し、しかもこれら上位集団の再編成は常時生起しているのであって、決して固定していない。これは市場の固定化、沈滞化、閉鎖化を抑制する開放性志向の市場原理がはたらいていることに起因する。つまり、そのことは研究・科学主義の価値基準によって教員ないし学科ないし大学の質の評定が行なわれ、それに基づき社会成層が形成される以上、質変動自体が大学間の序列の変動、すなわち垂直移動を規定すること、さらに質の向上ひいては社会的上昇移動を意図する大学相互間の人材獲得競争が人材の大学間水平移動を頻繁に結果することに示される。開放性志向を可能にし促進する条件は、学科制、オープン・アポイントメント・システム、同系繁殖の抑止、公募制、テニユア・システム、研究費、給与、住宅事情など小論で十分に論議しなかったことも含めた諸条件の中に見出すことができるだろう。要は、このような開放性志向が創造性、学問的生産性と密接な連

関をもつことである。そして、このような連関性は、主として社会学領域を中心として考察した米国大学教授市場の成層や教授の経歴型を通じて了解できたように、研究者、学者、科学者養成の背景のなかで深くかかわり作用しているのである。大学社会、大学教授社会が研究者、学者、科学者の知識の生産性、創造性という観点からいやがうえにも国際比較されざるを得ない現代情報化時代では、米国のアカデミック・システムは国際競争につよい性格をもつといえるだろう。

註

- 1) Rogan Wilson, *The Academic Man*, New York: Oxford University Press, 1942. Theodore Caplow and Reece J. McGee, *The Academic Marketplace*, New York: Basic Books, 1958. Paul F. Lazarsfeld and Wagner Thielens, Jr., *The Academic Mind*, Glencoe, Ill.: Free Press, 1958. Jessie Bernard, *Academic Women*, The Pennsylvania State University Press, 1964. Peter M. Blau, *The Organization of Academic Work*, New York: John Wiley and Sons, 1973. 新堀通也『日本の大学教授市場』東洋館, 1965。新堀通也・有本章「大学教授の経歴型の国際比較」『社会学評論』19巻3号, 1969。ウィリアム・K・カミングス(岩内亮一・友田泰正訳)『日本の大学教授』至誠堂, 1972。天野郁夫「日本のアカデミック・プロフェッション」広島大学大学教育研究センター大学研究ノート第30号, 1977。
- 2) 新堀通也(前掲書), ウィリアム・K・カミングス(前掲書), 有本章「外国における学閥—学界による国際比較—」新堀通也編『学閥』福村出版, 1974年版, 等参照。
- 3) Joseph Ben-David, "Scientific Productivity and Academic Organization in Nineteenth Century Medicine," in Bernard Barber and Walter Hirsch (eds.), *The Sociology of Science*, New York: The Free Press of Glencoe, 1962, p.p. 305–328. Diana Crane, "Scientists at Major and Minor Universities: A Study of Productivity and Recognition," *American Sociological Review*, 30 (October) 1965, p.p. 699–714. Joseph Ben-David, *Centers of Learning*, McGraw-Hill Book Company, 1977.
- 4) 友田泰正「統計から見た日本の大学院」広島大学大学教育研究センター『大学論集』第2集, 1974, 参照。
- 5) David Riesman, *Constraint and Variety in American Education*, University of Nebraska Press, 1956.
- 6) Burton R. Clark and Ted I. K. Youn, *Academic Power in the United States*, The American Association for Higher Education, 1976, p. 14.
- 7) *The CBS News Almanac 1977*, Hammond Almanac, Inc., 1976.
- 8) The American Sociological Association, *Guide to Graduate Departments of Sociology*, Washington, D.C., 1975.
- 9) Joseph Ben-David, *Trends in American Higher Education*, The University of Chicago Press, 1972, p.p. 38–41.
- 10) Burton R. Clark, *Problems of Access in the Context of Academic Structures*, Yale Higher Education Program Working Paper, 1977.
- 11) E. D. Duryea, "Evolution of University Organization", in James A. Perkins (ed.) *University as an Organization*, McGraw-Hill Book, Co., 1973, p.p. 15–37.
- 12) Peter M. Blau, *The Organization of Academic Work*, op. cit. p.197.

- 13) Rogan Wilson, *The Academic Man*, op. cit., p.p. 405–407.
- 14) Bernard Berelson, *Graduate Education in the United States*, McGraw-Hill Book, Co., 1960. p. 115.
- 15) Allan M. Cartter, *ph. D.'s and the Academic Labor Market*, McGraw-Hill Book, Co., 1976. p. 202.
- 16) George W. Pierson, *The Education of American Leaders*, Frederick A. Praeger, Publishers, 1969.
- 17) 新堀通也『日本の大学教授市場』（前掲）p.49.
- 18) Rogan Wilson, *The Academic Man*, op. cit., Appendices.
- 19) A. B. Hollingshead, “Ingroup Membership and Academic Selection,” *American Sociological Review*, Vol. 3, 1938, p.p. 826–33.
- 20) Clyde W. Franklin, Jr., Wen L. Li and Laurel R. Walum, “Sociologist on the Move, *The American Sociologist*, Vol. 17, 1972, p. 16.
- 21) *Who's Who in America 1976–77*, Marquis Who's Who, Inc., 1976.
- 22) Allan M. Cartter, *ph. D.'s and the Academic Labor Market*, op. cit., p. 167.
- 23) 友田泰正（前掲論文）p.p. 35 – 36, に詳しい。
- 24) *The American Sociological Association, Employment Bulletin*, Vol. 2, No. 9, September, 1977.
- 25) Mark Oromaner, “The Structure of Influence in Contemporary Academic Sociology”, *The American Sociologist*, Vol. 17, 1972, p. 12. William C. Yoels, “On Publishing or Perishing: Fact or Fable?,” *The American Sociologist*, Vol. 8, No. 3, 1973. Jonathan R. Cole, James A. Lipton, “The Reputations of American Medical Schools,” *Social Forces*, Vol. 55, No. 3, 1977.

<附記>本論文作成にあたり現在筆者が所属しているエール大学社会政策研究所高等教育研究グループの B. R. クラーク教授, G. J. ジャイルズ研究員の助言を得た。

A Study of the Characteristics of the Academic Marketplace in the United States: Stratification in the Field of Sociology

Akira ARIMOTO*

This paper deals with the academic marketplace in the United States by focussing on academic stratification in the field of sociology. In considering this problem, attention should be paid to how frequent mobility affects definitively academic productivity or creativity. The lack of mobility and creativity has been pointed out by some researchers as significant traits peculiar to the Japanese academic marketplace. In this context, the academic system as well as the academic marketplace in the United States is worth observing; partly because the former has a structure of frequent mobility and free competition leading to high academic productivity, and partly because the latter has trained a number of notable scientists as shown in the record of Nobel

Historically, minor institutions other than Ivy-League colleges could gain academic prestige by involving themselves in a research-centered merit system, establishing graduate schools for professional education and research, and founding new departments stronger in quality than other established departments. These trends have brought about diversification, competition, and hence stratification in the academic world. Academic stratification among graduate schools can be identified through the rating of the quality of faculties by the A. C. E. (American Council on Education) in 1970: universities such as Berkeley, Harvard, Yale, Stanford, Cal Tech, Chicago, MIT, Princeton, Michigan, Wisconsin, for example, are situated in the upper stratum.

The existing stratification seems to be the reflection of a closed academic marketplace, especially with regard to a characteristic inbreeding phenomenon; several institutions ranked in the upper stratum are apt to recruit their faculty from their own graduates. For example, out of twenty-one institutions ranked by A. C. E. in the upper stratum in the field of sociology, the five best universities consisting of Berkeley, Harvard, Chicago, Columbia, and Michigan hire their faculty from an in-group of the five best at the percentage of 68.8%, and as much as 80.9% in the case of the full-professorial rank. The inbreeding percentage of hiring graduates from the twenty-one top universities mount up to 87.5% at the five best, 84.1% at the twelve best, and 81.2% at all twenty-one. Though the findings thus far seem to indicate that there exists a closed society with a strong inclination to academic nepotism and inbreeding; it is also obvious that vertical and horizontal mobility among institutions frequently occurs. Observing in more detail the stratification in the field of sociology, we can recognize vertical mobility; upward mobility in Berkeley, UCLA, Johns Hopkins, Northwestern, etc., and downward mobility in Minnesota, Pennsylvania, Columbia, etc.

The reason why mobility constantly occurs is due to a sort of rule or custom that the individual institution should restrain the inbreeding ratio at less than twenty-five or thirty percent. As for the twenty-one institutions indicated above, the percentages are as low as 25.5% at the five best,

* Associate Professor, school of Education, Osaka Kyoiku University, and Higher Education Research Group, I. S. P. S., Yale University

12.1% at the twelve best, and 6.3% at the twenty-one best. This custom of controlling the percentages at less than thirty percent even in these major universities forces them to export their graduates to minor institutions. Downward mobility induced as a result of this tendency consequently causes the upward mobility of minor institutions and hence the coexistence of several competitive institutions in the upper stratum of stratification. At this stage horizontal mobility can occur and the institutions which have recruited some prominent scholars who graduated from other institutions (as shown in the case of Berkeley where the graduates of Harvard and Chicago are much in evidence) can enjoy the highest reputation, prestige, and ranking in stratification. These characteristics have been clearly demonstrated by the analysis of the career patterns of thirty-three professors of sociology who belong to five top universities and are listed in *Who's Who in America* 1976-77.

The findings are as follows: (1) Several institutions collectively stand in the upper stratum of academic stratification and no single institution dominates the academic marketplace. (2) This trend is a reflection of the research-centered merit system which is oriented towards open competition and is effectively working in the marketplace. (3) In so far as the prestige assessment of institutions is based upon the quality assessment of faculty, prestige is changeable and therefore also the ranking in stratification. This fluctuation causes not only vertical but also horizontal mobility among the institutions which are competing with other institutions for more quality, prestige, and upward mobility. (4) Competition among several strong institutions with prominent faculty and resources stimulates academic productivity and creativity. An academic system which displays the above characteristics will be strong in international competition for productivity and creativity.

